

# 虞美人草

映画文学人生論

原作：夏目漱石 (1907) 「朝日新聞」  
監督：溝口健二(1935年) 中川信夫(1941)  
出演：甲野藤尾 三宅邦子 霧立のぼる  
甲野欣吾 武田一義 高田稔  
宗近一 夏川大二郎 江川宇礼雄  
小野清三 月田一郎 北沢彪

悲劇は喜劇より偉大である

『虞美人草』の古い映画を二本続けて観た。溝口謙二監督のものは渋谷の映画館で鑑賞。ノイズで会話が聞き取りにくく、おまけに画面が不鮮明だが、なにしろ昭和十年作の骨董品フィルムだから文句は言えない。

二本の映画を観てから原作を読み直して、感じたのは、『坊っちゃん』や『吾輩は猫である』と比較すると、ユーモアがとぼしいことだ。落語風な笑いが影をひそめ、真面目になっている。

ただし、冒頭、比叡山に登る甲野欣吾と宗近一の会話には『吾輩は猫である』の太平の逸民たちの会話のようなユーモアがある。

「これから君は外交官の雅号を取るんだろう」

「ハハハハあの雅号は中々取れない。試験官に雅味のある奴が居ない所為(せい)だな」

「もう何遍落第したかね、三遍か」

「馬鹿を申せ」

「じゃ二度か」

「なんだ、ちゃんと知ってる癖に。憚(はばか)りながら落第はこれでたった一遍だ」

甲野は哲学者と称している高等遊民、宗近は外交官試験を一度か二度、しくじった落第生——このコンビの会話は面白くなりそうだが、二人はやがて妙に真面目になって、読者の期待を裏切る。



# 虞美人草

—— 映画文学人生論

「藤尾の様な女は今の世に多すぎて困るんですよ。気をつけないと危ない」と甲野欣吾はいう。冗談ではなく、真面目に言っている。

藤尾はシェイクスピアを読む。クレオパトラのように驕慢な紫の女、新しい文明の淑女だ。朝日新聞に『虞美人草』の連載がはじまると、評判になり、三越では虞美人草浴衣が売り出された。

欣吾にとって藤尾は腹違いの妹である。寅さんとさくらとの関係と同じだが、欣吾は藤尾をたった一人の可愛い妹だとは思っていない。藤尾が死ぬと、読者からは抗議の手紙が殺到したが、欣吾は日記に、「悲劇は喜劇より偉大である」と、哲学者らしいことばを書き記しただけ。

一方、宗近は合格するはずがないと思われていた外交官試験に合格すると、「人間は真面目になる機会が重なれば重なる程出来上がってくる」と言っていて、友人の小野に説教する。

小野は純文学専攻で、恩賜の時計を誇る秀才。藤尾と結婚して、甲野家の養子になるつもりでいたのに、宗近の真面目な忠告により藤尾と別れ、恩人の娘小夜子と結婚せざるをえなくなった。

欣吾が寅さんのように、たった一人の妹が可愛いと、口先だけでも言っていれば、藤尾は死に追い込まれるようにはならなかったと思う。はたして悲劇は喜劇より偉大なのだろうか。

あの山は随分遠いね虞美人草